

本日の学び:「売られたヨセフ」 テキスト:創世記37章18-36節

【理解の手がかりとして】

創世記の終盤には、有名なヨセフ物語が記されている。それはヨセフの波瀾万丈の生涯で、地理的にもカナンからエジプトにわたり、ダイナミックで巧みな構成となっている。この物語は、イスラエル民族のエジプト移住という歴史的事情を説明しており、それはやがてイスラエル民族の歴史に決定的な意味をもつ「出エジプト」への伏線となっている。

ヤコブ(イスラエル)には12人の息子がいた。彼はその中でヨセフを大変かわいがった。それはヨセフが、ラケルから生まれた子であり、また「年寄り子」(37:3)だったから。ヨセフには裾の長い晴れ着を着せたが、そのことは他の兄弟たち(別の母のもとに生まれた者たち)の憎しみを生むこととなった(37:1-4)。

そんな中、17歳のヨセフは夢を見た。それは畑で束を結わえていると、ヨセフの束が立ち上がり、兄たちの束がまわりに来て拜んだという。それを聞いた兄たちが怒ったのはいうまでもない。ヨセフはもうひとつの夢を見た。太陽と月と11の星たちがあらわれ、ヨセフを拜んだという。太陽は父、月は母、11の星は兄弟のことか。このことは父ヤコブの怒りを買い、兄たちはますます怒り出した。しかし父ヤコブは「このことを心に留めた」(37:11)という一文は意味深い。

ヤコブは、神が夢でヨセフに何かを語りかけているかもしれないと考えて、このことを心に留めたのではないだろうか。それはヤコブ自身も夢の中で神の使いから何度も大切なことを語りかけられた記憶があったからである。ベテルでも夢を見(28章)、叔父ラバンのもとから出て「故郷に帰りなさい」(31:11)という指示も彼は夢の中で聞いている。ゆえにヤコブは、このヨセフが見た夢のことを心に留めて、いろいろ思い巡らせていたのだと思われる。

一方、兄たちは相談して、この憎らしいヨセフを殺害しようとするが、長男ルベンのはからいで、穴に投げ込まれたが命は助かった。兄たちはヨセフを「銀20枚」(※1)でエジプトへ下るイシュマエル人(※2)に売り飛ばし、「裾の長い晴れ着」(37:32)に雄山羊の血をつけて、父ヤコブに見せ、ヨセフは野獣に食い殺されたと装い(※3)報告する。

※1 銀20枚とは、男子奴隷を売買する際の標準的な値段であった。ちなみにイスラエルにおいて人を主に奉獻(終身誓願に相当する代価)するとき、「5歳から20歳の人の相当の額」(レビ27:5)が銀20枚(シケル)である。

※2 「イシュマエル人」はアブラハムの子イシュマエルの子孫(その系図は25章12節以下)。なお、ここで取引を行ったのが一体誰と誰なのか、「ヨセフの兄たちとイシュマエル人」か「ミディアン人とイシュマエル人」なのか。結論は、『聖書教育』の取る立場の前者と見る。それは37:27より明らか。そもそも「ミディアン人」は「イシュマエル人」の中の特定の部族の人々を指しているらしく、ヤハウエ資料が「イシュマエル人」を使い、エロヒム資料は「ミディアン人」を使ったと言われることから、ここには『聖書教育』筆者の言う「資料的、翻訳的な混乱」があるものと思われる。「メダン」(37:36)とはアブラハムの子・その子孫(ミディアンと同意と思われる。創世記25:2)。

※3 息子たちによる偽装工作である。父イサクをだましたヤコブは(27:15)、ここでは自分の息

子たちから衣服によって騙されている。父ヤコブが人を騙したので、息子たちも、かつてシケムの人々を騙し(34:13)、今また父ヤコブを騙している。このようにヤコブが関わる話には、人を騙す話が多い。聖書にこのように人を騙す物語があるのとは非常に残念なこと。しかし、逆にそれだけ聖書は人間の実像をありのままに映し出しているとも言える。嘘をついた結果、自分も人から嘘で騙されるという教訓とも取れる。

ヤコブは嘆き悲しんで言った。「ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府へ下って行こう」(37:35)。「陰府」とは死人の住む場所のことであるが、ヘブライ人にとって、それは「エジプト」のことをも意味していたともいう。父ヤコブは前者の意味で言ったのであろうが、物語としてはまさに後者の展開を見せ、実に不思議な仕方を実現する。

『聖書教育』より

「兄たちのしたことは、殺人にも匹敵する残酷な犯罪であり、ヨセフを苦しめただけでなく、兄たち自身を苦しめ続けてゆくことになるのです。暴力が内包する本当の恐ろしさが語られているのではないのでしょうか。」(聖書の学び～銀20枚は誰の手に?)

「ヨセフ物語自体を私たちの時代の隠喩としてとらえてみることで見えてくるものは何でしょうか。」
(大人クラス)